

昭和16年12月8日永井荷風の日記と南原繁の短歌

今年も12月8日が巡ってきた。この日を思い出す人は最近少なくなっているようだが、昭和16年(1941年)12月8日は太平洋戦争が始まった日だ。この日、日本帝国海軍の空母6隻から発進した艦載機183機(第1波攻撃隊)が、ハワイ真珠湾内に停泊中の戦艦や陸上基地を奇襲し、大きな戦果を挙げたのだ。日本では12月8日の早朝ということになっているが、時差のため、ハワイでは12月7日の午前中だったから、アメリカでは開戦の日が12月7日になっている。

太平洋戦争に関しては、多くの書物等が出版され、研究がされてきたが、開戦から70年近い時を経て、世界情勢が全く変わってしまった今日、この戦争の意味はあまり問題にされないようになっていると思う。しかし、ハッキリしていることは、日本が惨敗を喫して、その結果として沖縄をはじめとする各地にアメリカ軍の基地が現存し、それらをどうすることもできないということだ。また、北方領土の4島がロシアに占領されたままになっている。

戦争に負けるということは、そういうことなのだ。これは日本に限ったことではない。同じ敗戦国のドイツにも、アメリカ軍の基地や使用目的のわからない施設がある。私は、数年前国際会議でハイデルベルクに行ったとき、観光名所の古城の裏山にケーブルカーで登ったことがある。ケーブルカーの終点の少し先にはアメリカの施設があり、何をしているのかわからなかった。多

分高度の電波探知をしているだろう。同じような施設は、イタリアのピサに近い地中海沿いにもあり、イタリア人の友人はそれが何のために使われているのかわからないと言っていた。いずれも相当広い土地である。

開戦時の日本では、ほとんどの国民が今では信じられないような心理状態になっていたようだ。厳しい言論統制下で、自分自身をマインドコントロールしていたとも言えるだろう。そのことについては、いろいろな人たちの証言があるが、若い中国文学研究者だった竹内好が開戦1箇月後に書いた文章は、当時の日本の知識人が書いた(書かされた)ものの代表といえるだろう。それは「十二月八日宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持ちであった。(後略)」というものだ。これは冷静な判断に基づく発言ではない。評論家として既に名をなしていた小林秀雄も同じようなことを言っていたという話もある。

それでは、誰もがこのようだったのかというと、そうではなかった。非常に少数だが、醒めた目で状況を見ていた人たちがいた。永井荷風が長い年月にわたって書き続けた「断腸亭日乗」の昭和16年12月8日から12日までの日記には、次のように書かれている(岩波文庫による。原文は縦書き)

《十二月八日 褥中小説『浮沈』第一回起草。嘯下土州橋に至る。日米開戦の号外

出ず。帰途銀座食堂にて食事中燈火管制となる。街頭商店の灯は追々消え行きしが電車自動車は灯を消さず。省線は如何にや。余が乗りたる電車乗客雑踏せるが中に黄いろい声を張上げて演舌をなすものあり。》
《十二月九日 くもりて午後より雨。開戦の号外出でてより、近隣物静になり来訪者もなければ半日心やすく午睡することを得たり。夜小説執筆。雨声瀟々たり。》
《十二月十日 雨歇み午後に至って空霽る。》
《十二月十一日 晴。後に陰。日米開戦以来世の中火の消えたるやうに物静なり。浅草辺の様子いかがならむと午後往きて見る。六区の人出平日と変りなくオペラ館芸人踊子の雑談また平日のごとく、不平もなく感激もなく無事平安なり。余が如き不平家の眼より見れば浅草の人たちは堯舜の民の如し。仲見世にて食料品をあがなひ昏暮に帰る。》
《十二月十二日 開戦布告と共に街上電車その他到处に掲示せられし広告文を見るに、屠れ英米我らの敵だ進め一億火の玉だとあり。或人戯にこれをもじりむかし英米我らの師困る億兆火の車とかきて路傍の共同便処内に貼りしといふ。現代人の作る広告文には鉄だ力だ国力だ何だとダの字にて調子を取るくせあり。寔にこれ駄句駄字といふべし。（後略）》

この日記で、荷風は真珠湾攻撃の戦果について一言も触れていない。元来完全に軍部に背を向けていた荷風には、ひとつの戦いでの戦果などどうでもよく、いずれは負けるに決まっているという確信があったのだろう。恐ろしいぐらいに反体制に徹していたのだ。

何故他の人たちにはできないことが荷風にはできたのだろうか？ ひとつには、荷風が若いときにアメリカとフランスで生活した経験があり、欧米と日本の実力の差を実感していたこと、英語だけでなくフランス語にも堪能で、帰国後もフランスの書物を自在に読みこなしており、それが彼の視野を広げ、他の日本人たちと比べて、物の

見方が違っていたことがあるだろう。もうひとつは、荷風の書くものはよく売れたので、経済的に困らない立場を固めていたことがある。つまり、荷風は、職に就いている人たちには強くかかっていた圧力から自由だったのだ。

収入を得るため職に付いていた人の中にも、世界の情勢が見えていた人たちはいた。しかし、そういう人たちが置かれていた環境は、軍部主導の政治を批判できるようなところではなくなっており、それどころか自分の本音を日記に書くことすら許さなかったろう。そのような人たちのひとりとして、後に東大総長になった南原繁がいる。南原は歌人でもあったので、昭和16年12月8日に次の3首を詠んでいる（岩波文庫の「歌集 形相」による。原文は縦書き）。この程度のものを書いておくだけでも、大変な決意が必要だったろうが、南原がそうしたことは立派なことだった。南原の短歌には、字余りのものが多いのだが、ここではその是非には触れないことにしよう。

《人間の常識を超え学識を超えておこれり
日本世界と戦う》
《日米英に開戦すとのみ八日朝の電車のなかの沈痛感よ》
《民族は運命共同体といふ学説身にしみて
われら諾はむか》

また、翌年の新春賦のなかの一首として次のように詠んだ。私はこれが一番好い歌だと思っている。

《埋火の底ごもる熱をもち堪えてこの年月
を生くべく思ほゆ》

このような日記が書かれ、短歌が詠まれてから69年という年月を経た今日、私たちは有り余るばかりの言論の自由、表現の自由を持っている。しかし、この自由は何時までも続くものなのだろうか。（おわり）